

ばく りゅう
麦粒

2025. Winter

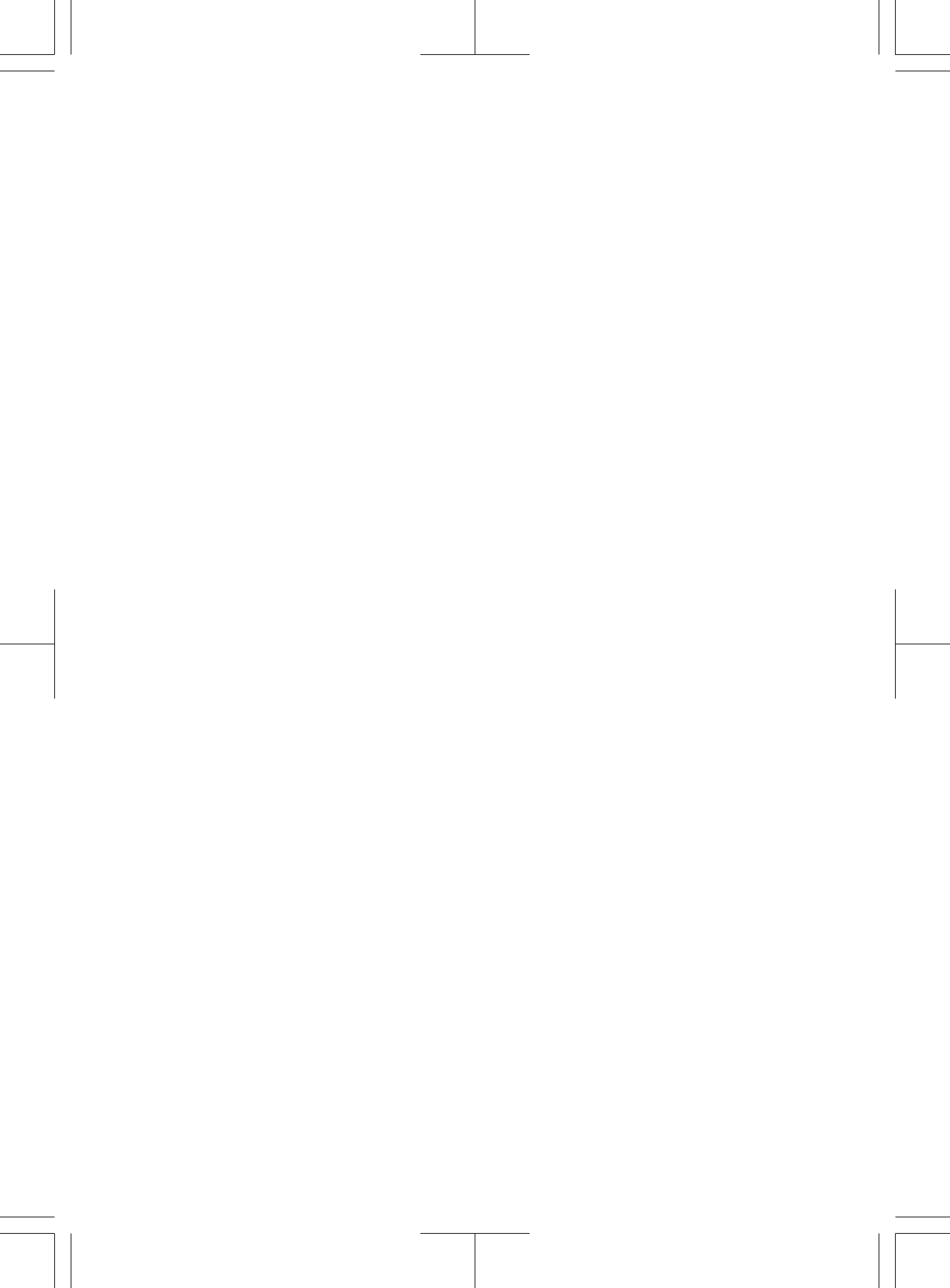
麦粒／NO. 144

発行・キリスト教センター

目 次

- 核と敬神愛人 澤 村 雅 史 (3)
- “If” by Rudyard Kipling Roger Alun (10)
- 「愛と慈悲 ー宗教による捉え方の違いとその実践ー」
..... 吉 田 龍 宏 (14)





核と敬神愛人

スポーツ健康学部 教授 澤 村 雅 史

²⁵すると、ある律法の専門家が立ち上がり、イエスを試そうとして言った。「先生、何をしたら、永遠の命を受け継ぐことができるでしょうか。」
²⁶イエスが、「律法には何と書いてあるか。あなたはそれをどう読んでいるか」と言われると、²⁷彼は答えた。『「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい、また、隣人を自分のように愛しなさい」』とあります。」²⁸イエスは言われた。「正しい答えだ。それを実行しなさい。そうすれば命が得られる。」²⁹しかし、彼は自分を正当化しようとして、「では、わたしの隣人とはだれですか」と言った。

(新約聖書 ルカによる福音書10章25～29節)

野球と平和

今年（奨励の時点＝2024年）の6月、プロ野球セ・パ両リーグ交流戦で、日本ハムファイターズと対戦した中日ドラゴンズのファンに向けて、会場となったエスコンフィールドの電光掲示板に、以下のようなメッセージが掲げられました。

1997年開業のナゴヤドーム（現・バンテリンドームナゴヤ）は、「平和の大切さ」を重んじる素晴らしい球場です。日本のプロ野球は今年90周年を迎えますが、その歴史の中で唯一休止し

たのが、1944年。太平洋戦争のときでした。

当時、現在のナゴヤドームが建つ場所には工場があり、空襲により300人以上の尊い命が奪われました。その中には多くの女性や学生も含まれていました。

ナゴヤドームには「平和の礎となられた人々を決して忘れず、野球やコンサートなどを通して感動を味わうことができることに深く感謝し、ここにご冥福をお祈りいたします」と刻まれたプレートが掲出されています。

われわれもこの言葉を胸に、日々プロ野球が開催できること、多くの皆さまにご観戦いただけることへの喜び、そして、先人のお陰で歴史を重ねていることに感謝し、今後も、皆様と共にプロ野球界の発展に努めて参ります。

ここ名古屋では1942年以降63回におよぶ激しい空襲で、上記で触れられている300名を含む8,000名近くの人々が命を奪われ、この熱田でも2,000名もの人が焼かれて亡くなりました。このような一般市民を巻き込んだ（あるいは明確に標的とした）攻撃は、1937年にスペインの町ゲルニカに対してナチス・ドイツが行った空爆に始まります（この悲劇を描いたのがピカソの作品『ゲルニカ』です）。翌年には日本の陸軍航空隊による重慶爆撃、ロンドン、ドレスデン、東京、大阪、名古屋、広島、長崎……。その後もシリア、アフガニスタン、ウクライナそしてパレスチナ・ガザ……。戦うすべを持たない民間人への空爆は、今この時も続いています。

少し突き放して言えば、広島・長崎に行われた爆撃は、人間の愚かさ・残酷さの連鎖であるこの歴史の一コマにすぎないという見方もできることでしょう。し

かし、広島・長崎で起きたことが他と異なるのは、それがそれぞれただ一発の特殊な爆弾で起きた、ということです。

「被爆の実相」とは

名古屋空襲の8,000名の犠牲者も、とてつもない犠牲ですが、広島では14万人±1万人というさらにおびただしい数の人命が奪われました（1万人という、誤差と呼ぶにはあまりに膨大な人数には理由があるのですが、それは後で述べることにしましょう）。

原爆の爆心地から2 km以内の建物は爆風で破壊され、残った建物も続いて起こった火災で焼き尽くされました。半径2 kmといえば、名古屋駅を中心とした場合、ちょうど北は名古屋城、南は本学しろとキャンパス、東は栄のあたりが含まれるくらいの範囲です。名古屋市内の空襲で被災した範囲も市中心部から2 kmほどの範囲のようですが、それが一発の原子爆弾で焼き尽くされたのです。

爆発の瞬間には核分裂反応による摂氏100万度の火の玉が生まれ、この火の玉に照らされた地表は摂氏3,000度から4,000度、鉄の沸点をはるかに超える熱線に焼かれました。「原爆ドーム」として知られるようになった産業奨励館の丸

い屋根は薄い銅板でおおわれていましたが、一瞬にして蒸発したと考えられています。一方で、人間の体は水分を多く含むため、この一瞬の熱線で焼き尽くされることはありませんでした。しかし、皮膚の表面はやけただれ、筋肉組織と皮膚の間の水分が瞬間的に蒸発したために、皮膚は破けて垂れ下がったと言われています。

熱線に続いて地表を襲ったのは爆風です。1平方メートルあたり35 t、最大風速440m/sという猛烈な爆風は日本の観測史上もっとも強い自然風の約5倍、普段私たちが経験する中でもっとも強い台風のさらに10倍ほどの強烈な風です。

激しい爆風として押し出された空気は、爆心近くで真空状態を造り出し、次の瞬間には猛烈な吹き戻しが起こりました。爆心近くで行き場をうしなった風は、唯一開けた上空に向かって登り、あの「きのこ雲」という特徴的な雲を形成することになりました。

人類史上初の兵器としての原子爆弾は、1945年8月6日8時15分という、いつもとかわらない平凡な夏の朝、人々の暮らしの真ん中を狙って投げ込まれましたが、その日の朝は雲一つない快晴だったといえます。ところが、原爆投下後、爆風に

よって空中にまきあげられた放射線を含んだチリが、大気中の水分と結合して、黒い雨となって地表に降り注ぎました。

広島市内にいて直接に放射線を浴びた人、黒い雨によって放射線を浴びた人、家族の搜索や任務のために後で市内に入って放射線を浴びた人、その多くが健康を害し、急性障害や、後遺障害によって命を落としました。生き延びた人の中にも、今に至るまで長く後遺障害に苦しむ方も大勢いらっしゃいます。これが熱線、爆風に続く第三の被害、放射線による障害です。

佐々木禎子さん、という少女もその一人でした。彼女は2歳の時に黒い雨を浴び、その後元気に成長し、かけっこでは全国レベルの速さをほこる健康な少女でしたが、12歳になる年に白血病を発症し、あっという間に亡くなりました（彼女の同級生たちは、禎子さんのために、また同じようにして亡くなった多くの広島少年少女のために、全国に呼び掛けて「原爆の子の像」を建立しました。また、SADAKOの名は平和の折り鶴とともに、世界中に知られています）。

このように、原爆には熱線、爆風、放射線という三つの種類の被害があることが広く知られていますが、あるとき私に

「原爆にはね、第四の被害というものがあるよ」と教えて下さった方がいます。第四の被害、それは歴史・文化・共同体の徹底的な破壊です。名古屋の空襲も、広島・長崎も、人の命が奪われるという痛ましさでは変わるところはありません。しかし、広島・長崎ではそれぞれたった一度、一発の原子爆弾がそれを引き起こした。これは何を意味するのでしょうか。

広島平和記念公園には、原爆詩人として知られる峠三吉の詩碑があります。そこにはこう刻まれています。

ちちをかえせ

ははをかえせ

としよをかえせ

こどもをかえせ

わたしをかえせ

わたしにつながる

にんげんをかえせ

にんげんの

にんげんのよのあるかぎり

くずれぬへいわを

へいわをかえせ

この詩碑が訴えかけるのは、「わたし」も「わたし」を知るすべての人も同時に一瞬にして殺されてしまったということです。そうなると、「わたし」が生きて

きた記憶は、証は、どこに残るでしょうか。「わたし」の生活、その文化、家族やご先祖さまやご近所さんといった共同体、その歴史をも、あたかも最初からそんなものが存在していなかったかのようになに消し去ってしまう。誰がどこで亡くなったかさえ正確にわからない。だから死者数も±1万人という誤差でしか語ることができない。それが原爆のむごさなのです。

核兵器と敬神愛人

さて、本日の奨励のタイトルを「核と『敬神愛人』」としました。敬神愛人とは、皆さんよくご存じの、私たちの建学の精神ですね。この言葉の根拠となる聖書の箇所は、本学では通常マタイ福音書22章34～40節が挙げられることが多いのですが、本日はルカ福音書版で読んでみました。有名な「良いサマリア人のたとえ」の箇所です。

イエス・キリストはここで、家族や友人などに対象を限定した「隣人」愛の問題点を指摘しています。また、自分から見て誰が自分の隣人であるかを問うのではなく、いま倒れている人、必要を抱えている人の隣人に「わたし」ができるか、をこそ問うべきだと教えて

おられます。

隣人愛そのものは、いかに素晴らしいものとしても、そこに隣人となる対象を限定する発想が伴うならば、まさに隣人愛こそが戦争や差別の源にすらなってしまうのです。隣人を守るために敵を攻撃するのが戦争であり、隣人を大切にすることの裏返しは隣人でないものへの差別だからです。そのことを、広島原爆をはじめとする核の人類史が示しています。

1945年8月6日に広島に人類史上初の原子爆弾を投下したエノラ・ゲイという爆撃機は、その出撃に際して牧師が祈りを捧げています。「全能の父なる神よ。（中略）彼らが命じられた飛行任務を行うとき、彼らをお守りくださるように祈ります。」この祈りは、戦友たちの無事を祈る誠実な祈りである一方、成功を祈られた任務とは多数の民間人を含む14万人±1万人もの人間を虐殺することを意味しました。もしそこにまで想像力が及んだなら、この従軍牧師はこの祈りを祈ることができたでしょうか。

長崎に二番目となる原子爆弾を投下したボックスカーという爆撃機に祈りをささげたのは、カトリックの司祭でした。目標であった北九州が天候不良のため、

この爆撃機は結局、浦上天主堂という東洋一ともいわれたカトリックの大聖堂を標的として原子爆弾を投下することになりました。

実際に原爆が投下され、そのおぞましい被害が報告されると、多くのアメリカのクリスチャンたちは深く心を痛め、当時のトルーマン大統領に対して抗議しました。原爆投下のニュースに多くの良心的なクリスチャンが“disturbed”（心痛めている）と記された抗議の電報に対し、トルーマンは同じ単語を使って、自分のほうこそ日本によって“disturbed”（苦しめられている）と皮肉を交えて答えたといえます。

しかし、ボックスカーを祈りによって祝福したカトリック司祭、ジョージ・ザベルカ師は、戦後になって自分の祈りがいったい何を意味したのかを目の当たりにし、深い後悔と悔い改めで胸がいっぱいになったといえます。

アメリカ人の中には、とくに日本との戦争を直接知る高齢世代を中心に、原爆投下は正しかった、少なくともやむを得なかったと考える人が多くいます。しかし、若い世代を中心に、原爆投下が誤りであったと考える人も増えてきているようです。

核の「平和利用」と敬神愛人

ここまで、「敬神愛人」や「隣人愛」でさえ、いやむしろ『隣人』愛こそが、むしろ戦争を生み出したり、正当化したりすることにつながることを見てきました。ここからは、戦後の日本で、隣人愛にもとづく善意が奇妙な方向に向かった事例についてお話したいと思います。

戦後、冷戦時代と呼ばれた時期の日本や世界では、アメリカの核開発の思惑や、原爆をタブー視する風潮があいまって、「核の平和利用」を大々的に礼賛する世論が形作られていきました。広島・長崎に死をもたらした核の炎は、これから平和のために用いられるのだ、というメッセージに、多くの人が希望を持ちました。原子力を意味する鉄腕「アトム」といったヒーローや、ドラえもんが原子炉を動力源としているという設定がコロコロコミックに載ったりした時代です。

そんな風潮の中、アメリカ政府が出資して広島に原子力発電所をつくるという案が、真剣に検討されたこともありました。核によって痛みを与えられた街とそこに住む人々に、彼らを焼いた炎を今度は平和利用のために与える、そうすることで犠牲者の死に意味を与え、被爆者たちの心をいやすのだ。これこそがキリス

ト教の隣人愛の表し方なのだ、ということです。

3.11を経験し、いまなお福島第一原発の処理という問題を抱える私たちからすれば、まともな発言とは思えませんが、当時の彼らは大まじめに、心の底からこれこそが隣人愛だと信じて疑わなかったのです。そして、実は多くの広島の被爆者たちも当時、アトムズ・フォー・ピース、平和のための核というメッセージを歓迎したといわれています。しかし3.11の原発事故以来、そのように歓迎した広島の被爆者たちの心には、大きな後悔が残りました。

結局、広島に原発をつくる話は立ち消えとなりましたが、かたちを変えて、キリスト教の聖公会という教派からの多額の献金を原資として、あるキリスト教系大学に実験用原子炉がつくられることになりました。この原子炉は2001年に廃炉とすることが決まりましたが、現状維持と廃炉に向けて多額の費用がかかっていると聞いています。

「敬神愛人」ver.2.0に向けて

ここで、ルカ福音書のイエス・キリストの教えに戻ってみたいと思います。あなたの敬神愛人は、隣人愛は、どこに向

かっているか、向けられているか。自然に親しいと思える人の範囲でとどまっているか、また、あなたのそのまなざしは本当に倒れている人そのものに向けられているだろうか。独善的な、あるいは排他的な「隣人」愛にとどまっていないだろうか。そんなイエス・キリストからの問いかけを心のうちに宿して、どうかあなた自身の「敬神愛人」ver.2.0に向

けて、一緒に学び、歩んでいただきたいと願っています。

※興味をもってくださった方は、ぜひ以下の論文にも目を通してみてください。
澤村雅史「核時代とキリスト教－核をめぐるキリスト教の言説についての一考察－」、広島女学院大学国際教養学部紀要（４）、2017、72-83頁。

（さわむら まさし スポーツ健康学部教授 2024.7.16 しろとりチャペル 平和を願うチャペルアワー奨励）

“If” by Rudyard Kipling

Roger Alun

Yet we who have this spiritual treasure are like common clay pots, in order to show that the supreme power belongs to God, not to us. We are often troubled, but not crushed; sometimes in doubt, but never in despair; there are many enemies, but we are never without a friend; and though badly hurt at times, we are not destroyed. At all times we carry in our mortal bodies the death of Jesus, so that his life also may be seen in our bodies. Throughout our lives we are always in danger of death for Jesus' sake, in order that his life may be seen in this mortal body of ours. This means that death is at work in us, but life is at work in you. The scripture says, “I spoke because I believed.” In the same spirit of faith, we also speak because we believe. We know that God, who raised the Lord Jesus to life, will also raise us up with Jesus and take us, together with you, into his presence. All this is for your sake; and as God's grace reaches more and more people, they will offer to the glory of God more prayers of thanksgiving. For this reason we never become discouraged. Even though our physical being is gradually decaying, yet our spiritual being is renewed day after day. And this small and temporary trouble we suffer will bring us a tremendous and eternal glory, much greater than the trouble. For we fix our attention, not on things that are seen, but on things that are unseen. What can be seen lasts only for a time, but what cannot be seen lasts forever.

2 Corinthians 4: 7-18 (Good News Translation)

I chose this verse from the Bible - and it's connected to my speech today - because it's about despair or suffering and these can be very powerful emotions. It's this idea of emotion that I want to consider with my theme today. There is a somewhat old, very famous poem from England. The poem's title is very simple it's called "if". The poem was written by a man called Joseph Rudyard Kipling about 130 years ago during the Victorian era. The Victorians were very religious, Christian people, and they were also a very calm people and this calmness we call stoicism. They believed in trying not to show too much emotion, either too much happiness, too much sadness, or too much fear or anger. This poem was written by Rudyard for his children. The idea was that the poem was a way to teach young people how to behave and how to act in the world in such a way that their emotions wouldn't control them. They should have mastery over their emotions. It's a very long poem. I will read you some.

the general idea is that you are not a slave to your emotion.. This idea of stoicism is a very old one, it was not created by the Victorian British. It's a much older belief or philosophy from ancient Greece so it's about 2500 years old. Let me read some of the poem to you.

If you can keep your head when all
about you

Are losing theirs and blaming it
on you,

If you can trust yourself when all men
doubt you,

But make allowance for their
doubting too;

If you can wait and not be tired by
waiting,

Or being lied about, don't deal in
lies,

Or being hated, don't give way to
hating,

And yet don't look too good, nor
talk too wise:

If you can meet with Triumph and
Disaster

And treat those two impostors
just the same;
If you can bear to hear the truth
you've spoken
Twisted by knaves to make a trap
for fools,
Or watch the things you gave your life
to, broken,
And stoop and build 'em up with
worn-out tools:

If you can make one heap of all your
winnings
And risk it on one turn of pitch-
and-toss,
And lose, and start again at your
beginnings
And never breathe a word about
your loss;
If you can force your heart and nerve
and sinew
To serve your turn long after they
are gone,
And so hold on when there is nothing
in you
Except the Will which says to the
m: "Hold on!"

Yours is the Earth and everything
that's in it,
And — which is more — you'll be a
Man, my son.

There's one sentence or phrase that I
want to focus on today that is:
"If you can meet with Triumph and
Disaster
And treat those two impostors
just the same;"

In your life you may have already
experienced many instances of success
or even many instances of failure or
even disasters. What Rudyard is
saying here is that these two events
are but fleeting moments in your life
and the feelings that you may attach
to those moments are also temporary.
We can acknowledge how we feel about
events in life but we do not allow those
feelings to rule us or dictate our future
actions .This is quite important
because victory and failure both
important for your life. You need both
in order to learn. You cannot develop
as a person without failure. But you

also need to experience victory, in order to believe you have agency or control over your life. Don't become a slave to emotion. You shouldn't believe that because, for example, you couldn't pass the TOEIC test it means that you are “a failure” and should give up trying.. It's just a moment in

your life. By the same token, your successes shouldn't not lead you to assume you are all-knowing and infallible. Humility is a virtue here, I think, as so much of our fate is in God's hands. Thank you very much. I hope you will “think” about, more than “feel” your victories and failures.

(A.ロジャー 外国語学部准教授 2024.7.4 しろとりチャペル Englishチャペルアワー奨励)

「愛と慈悲 ―宗教による捉え方の違いとその実践―」

吉 田 龍 宏

イエスは、ご自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「私の言葉にとどまるならば、あなたがたは本当に私の弟子である。あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にする。」

（ヨハネによる福音書 8 章31～32節）

自己紹介から今日の話に繋げていきたいと思います。私はスポーツ健康学部のこどもスポーツの方で教鞭をとっております。吉田龍宏と申します。担当しているのは幼稚園の先生になるための科目です。愛知県のあま市というところで認定こども園の園長を務めています。そしてその認定こども園は元々お寺が基盤になってつくられた保育園です。ですから私はそこの園長でもあり、大学の教員でもあり、そして真言宗の豊山派というお寺の住職でもあります。住職がこの場所に立って喋るというということは、おそらくなかなかないことですので、今回お話をいただいた時にはてさてどうしようかと困惑しましたが、せっかくの機会ですので、皆さんの前に立たせていただくことにしました。しばらくお耳を貸していただければ幸いです。この前の日曜日に、住職

になるという儀式をやったばかりの新米の住職です。

今日、私がチャペルに立ってお話することになったのは、教員がお話をするという名古屋学院大学ならではのことだかなと思います。ですが世界的にみればいろんな宗教を超えて平和や人々の安らぎを願うために、宗教家が宗教を越えて話をするということはありません。例えば世界経済フォーラム、いわゆるダボス会議でも奈良の東大寺の貫主が参加されて話をしたり、あるいはイスラム教の方が話をしたりしながら、宗教を越えて人々の平和や幸せをどうしたらつくれるのかを真剣に話していっている、そんな姿があります。今日はそれに似た機会が与えられたと思っています。

私はキリスト教を「愛の宗教」という言葉のキーワードで知った記憶がありま

す。これが正しいことかどうか分かりませんが、でも本学の建学の精神「敬神愛人」という言葉の中にも、正に「愛」という言葉が示されています。瀬戸総合事務部のある建物の3階に額が飾ってあります。そこにはマタイによる福音書22章37～39節の言葉が書かれています。

イエスは言われた。『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』

一方で私は仏教の住職です。仏教では愛という言葉をごんごに捉えているのかというと、実は愛は否定されるべきものという捉え方をするのですね。皆さん「四苦八苦」という言葉を聞いたことがあると思います。困った時の言葉として「四苦八苦」と表現されます。元々は仏教の専門用語です。それも大事な専門用語で、仏教をひらいたお釈迦様が、人間が生きていく中で苦しいのは4つの根本原因、それにプラス4つで合計8つの苦しみが人間の苦しみの根本なのだと言っています。4つの中心となる苦しみは、

生ること、老ること、病を得ること、そして死ぬこと。生老病死といいます。これが4つで、その他の4つの中の最初に、愛別離苦という言葉があります。愛する人と別れ離れ苦しむ、それで愛別離苦です。人間はどうしても、人と出会えばその人のことを大事に思い、または好きになり、でもいつかはその人と別れなければいけない。それは仕事で別れなければならぬかもしれないし、あるいは死という形で別れなければいけないかもしれない。だから愛するということは人の生きていくなかで苦しみの元なのだとお釈迦様は言ったとお経の中に書いてあります。でも実はキリスト教の愛はもっと広い意味での愛という言葉で、仏教の愛は小さな範囲の意味での愛ということなのだと私は思っています。なぜなら仏教の中にはキリスト教の愛という言葉に相当する言葉として、慈悲という言葉があるからです。慈悲の「じ」は慈しむ、「ひ」は悲しみという漢字ですが、あわれみという意味で悲と書きます。慈悲というのは、苦しみを取り除くことを慈と言い、人に楽しみ、安らぎを与えるということを悲と言って表します。そう考えると慈悲というのはキリスト教、もしくは聖書で書かれているような愛という言

葉と非常に似たような意味なのだろうというふうに思っています。だから皆さんはそれぞれ家にキリスト教や仏教、他にさまざまな違う宗教があると思いますが、でもいろんな宗教があっても人として大事にしてほしいと願われていることは一緒なのではないか、ということを改めて、この学校に就職して色々お話をしている中で思いました。

慈悲という言葉もいろいろな場面で使われます。お坊さんが慈悲を大切にすることを実践の中でいろいろなことを教えられるのですが、その中で無財の七施というものがあります。人の為にお金はなくても日常生活の中でこんなことを実践したら、それはキリスト教でいえば愛の実践、仏教でいえば慈悲を実践するということになるというふうなものです。今日はその無財の七施というものを皆さんに紹介して私の奨励にさせていただきます。

1つ目は眼施といいます。目は口程に物を言うというでしょう。コロナの時のことを皆さん思い出してください。マスクをしていると、目しか見えない。けれど、目しか見えていなくても、その目が非常に優しい目であれば、出会った人にすごく心に伝わりますよね。でも怒っている時は、やはり目がきつくなります。

だから怒っているとすごくよく目に出ます。先ほどいったように、私は保育園に勤めています。コロナの時に先生たちは子どもたちに顔を見せられませんでした。だから目の表情を大事にしようということ伝えました。就職する時の面接でも目を見られます。それぐらい目というのは人にさまざまな気持ちを与えることができるものなのです。

2つ目は和顔施といって、これは笑顔です。皆さん、もしも好きな人に告白して振られ、そして次にその人と会う時どんな顔をしますか。私は自分の先輩からこんなことを言われたのです。「次にその人と会う時に素敵な笑顔でおはようと言いな。」と言われたのです。「そしたらその人は自分が振ったことに悔いを残さないから。」あまりいい例えではないかもしれませんが。でも人に会う時に笑顔で接してくれることほど人から好かれることはありません。でも笑顔って難しいですよ。私は実習に行く学生さんに、鏡で自分の笑顔を見てごらんと言います。子どもからどんなふうに見られるかわかるから。笑顔ほど人に楽しみを与えるものはありません。

3つ目は言辞施、といって優しい言葉、相手を思う言葉です。

4つ目は身施といって、何か人のために行動するということです。人のために動く、相手のことを思って動くということです。

5つ目人のために心を配る心施、気配りをする事。

6つ目から難しいんですけど、床座施、と言って、席や場所を譲るということです。小さい頃、バスや電車でよくおじいさんやおばあさんが乗ってきたら席を譲りましょうと教えられたものですが、これ、いざやろうとすると恥ずかしかったりしてなかなか席を立てなかったりしますよね。でも席を譲ることは誰でもできることです。

最後は房舎施といいます。自分の家を提供するという事です。昔のインドだからこんな言葉が出てきたと思うのですが、いろいろな人が例えばお客さんとしてくる時に、綺麗に掃除をしてそ

して心地よく過ごしてもらおうとする、そういうふうに今の時代なら捉えたいのではないかと思います。

今申し上げた7つ、簡単に誰でもお金がなくてもできることなのです。今私は簡単にと言いました。でも実は私自身もなかなかできないことです。毎日笑っていようと思うけれどもついつい怒ってしまふ。子供に「こら」と言ってしまう。だから簡単そうなことだけでも、難しいことなのではないかと思います。でもこれをぜひ皆さん頭のどこかに入れていただいて、日々実践していただけたら、それが仏教でもでもキリスト教でも人に愛を与える実践になるだろうと私は思っています。どうぞ皆さんこれからいろいろな社会に出ていかれると思います。ぜひ素敵な愛を実践できる人になっていただけたら嬉しく思います。以上で今日の話が終わらせていただきます。

(よしだ たつひろ スポーツ健康学部准教授 2024.10.23 瀬戸チャペルアワー奨励)

チャペル・ブックレット

宗教部では今までの「宗教講演会」等のお話をブックレットにまとめています。ご希望の方は、キリスト教センターへお問い合わせください。大学ホームページからもPDFファイルでご覧いただけます。

- No.1. 「経済の論理と人間の論理」(塩沢 美代子)
- No.2. 「心を問い続けて」(谷 昌恒)
- No.3. 「国際化時代におけるキリスト教の使命」(徐 洗善)
- No.4. 「激動化する現代史と神のみことば」(池 明観)
- No.5. 「生きることの感動」(金 纓)
- No.6. 「生きるよろこび」(村田 佳寿子)
- No.7. 「心を支えているもの」(山本 将信)
- No.8. 「主の愛この眼にありて」(武岡 洋治)
- No.9. 「日本におけるキリスト教主義大学の使命」(池 明観)
- No.10. 「いのちを支えるホスピスケア」(相木 哲夫)
- No.11. 「天と地のひびき」(小塩 節)
- No.12. 「絵本のちから」(松居 直)
- No.13. 「ハイジ、クララは歩かなくてはいけないの？」
ーこどもの物語と聖書に見られる<しょうがい者>差別ー
(荒井 英子)
(金 永秀)
- No.14. 「お父さん、僕はなにに人？一問（はざま）から読む聖書ー」
(金 永秀)
- No.15. 「人権・生命の尊厳ー野宿生活者の現場からー」(松本 普)
- No.16. 「地球に、そして日本に生まれて今ここにいる」(太田 信吉)
- No.17. 「メイク・ア・ウィツシュ〜夢の応援団」(原 順子)
- No.18. 「人間関係を生きる知恵」(島 しづ子)
- No.19. 「命のことば」(水谷 誠)
- No.20. 「宗教が戦争の原因？ー神教がアブナイ？」(桃井 和馬)
- No.21. 「福田敬太郎ー神に向き合った生涯」(小野 静雄)
- No.22. 「F.C.クラインと『敬神愛人』」(黒柳 志仁)
- No.23. 「祈りつつ学び、感謝しつつ働く」
ー内村鑑三、名古屋英和学校赴任のころー」(葛井 義憲)
- No.24. 「NHK連続テレビ小説『エール』とキリスト教」
キリスト教主義大学が大切にしたいことー『敬神愛人』(西原 廉太)
- No.25. 「『迷い出たダンゴムシのたとえ』がわたしたちを生かす」
(早瀬 和人)
- No.26. 「中山間地のソーシャルワーク」(越智 祐子)
- No.27. 「キリスト教学校が大切にしてきたことー神の言葉はとこしえに立つー」
(神山 美奈子)